

## 要旨

### 1. 研究の背景

昨今、「システムの内製化」をトレンドとして目にする機会が増えてきたと感じる。

少し前までは積極的にアウトソーシングしていくのがトレンドだったこともあり、なぜ“内製化”をする必要があるのか、内製化におけるメリットと課題は何かがあるのか、どの会社でも取り入れられるのかなど、たくさんの疑問が出てきた。

当グループでは、内製化ができている状態の定義を「自社で仕様の把握ができており、データ解析やシステムの拡張がベンダー依存ではなく社内でできる状態」とする。内製化のノウハウが失われつつある昨今、IT 部門の人材をキーとした内製化の効果を研究する。

### 2. 課題

ベンダー依存に伴う、ブラックボックス化によって、IT 部門としての役割を果たせずに内製化を思うように進められていない企業は多いのではないだろうか。そのため、IT 部門の最適な役割での関わり方および IT 部門の人材としての求められる能力が何かを検討する必要がある。

### 3. 仮説

システムの内製化を達成するにあたり、以下の仮説を立てた。

IT 部門がシステム開発の上流工程にのみ関わることで内製化を推進しつつ、内製化にかかるコストも最小化できるのではないか。また、内製化プロジェクトを円滑に進めるにあたり IT 部門のどのような能力が必要となるのか紐解いていく。

### 4. 検証

内製化を前提としたシステム開発において想定されるシナリオをいくつか用意し、メンバー内で役回りを決め実際にシステム開発の一連のシミュレーションを行う。シミュレーション範囲は要件定義から基本設計までとし、各シナリオの成果物を、工数/品質/業務合理化/システム連携度/の 4 つの軸にそれぞれ重み係数を付けて評価する。複数あるシナリオの中で総合的に評価が高かったシナリオにおいて IT 部門がどのような役割で関わっているかを分析することで、システム開発における IT 部門の最適な関わり方および IT 部門に必要とされる能力を検証する。

## 要旨

### **5. 検証結果**

複数設定したシナリオの中で、最も評価が高かったシナリオは IT 部門(アプリ系の担当と、インフラ系の担当)がユーザ部門やベンダーと関与した場合である。

その際に求められる IT 部門の能力としては、ユーザ部門、ベンダーとのコミュニケーション能力、そしてユーザ部門の業務内容を把握したうえでビジネスサイドとエンジニアサイドの両方の観点から仕様を確定させる能力や、リスクや課題を見つけられる能力であった。

### **6. 結論・今後の展望**

結論としては、内製化を推進するにあたり、IT 部門はビジネスサイド、エンジニアサイドの両方を理解したうえで両者との連携が必要である。ビジネスサイドでは、業務内容を把握し、実際にシステムを利用する立場からどのようにしたいかを正確に捉える必要がある。また一方でエンジニアサイドに目を向けてみれば、システムを開発・運用していき、システムをうまく活用している事例や経験があり、かつデジタル知識の技術に対してもある程度精通している必要がある。IT 部門は両者を連携させるための重要な役割を担える。

今後の展望としては、今までのようにベンダーが要件定義から開発、保守運用までを担当することが少なくなる。詳細設計から保守運用までと担当する範囲が徐々に狭まっていくだろう。その一方で、ユーザ企業の IT 部門は今まで主に要件定義と運用部分のみを担当してきたが、保守性やシステムの拡張性の観点から設計書やドキュメントの成果物を自社で保管しておきたいというニーズが高まってくるものと思われる。その際に、ベンダーから採用した人だけでなく、事業部門に身を置いてきた人も採用することによって、内製化を推進するにあたっての理想の IT 部門を目指すことができると思われる。

文章内の記載の会社名および製品名は、各社の登録商標または各社に帰属する標章もしくは商号です。